

かんのん ふうどうかなしば
観音さまの不動金縛り

むかし、むかし、国祐寺の観音さまを盗もうと、大それたことを考えた泥棒がいました。

なにぶんにもこの観音さまは、由緒（いわれ）のある仏さまなので、きっと高く売れるにちがいない。ひともうけしてやろうと考えた泥棒は、夜ふけを待って観音堂へしのびこみました。

さつそく、厨子（仏像を安置する仏具）の扉を開き、観音さまを引き出して縄で縛り、背中にしよってお堂から出ました。外は、足もとも危ういほどの真つ暗やみでしたが、手さぐりで鐘つき堂の近くまで降りてきました。

ところが、そのときでした。観音さまを背負っている縄が、急にぐいぐいとしまり、泥棒は金縛りにあったように身動きができなくなり、その場にどっと倒れました。そして、そのはずみに手首が折れて、大けがをしまいました。

あくる朝早く、国祐寺の寺男が、本村へ用事に出かけようと鐘つき堂の前まで来ると、なにやら黒いものがうずくまり、ウンウンうなっているのを見つけました。近づいてみると、観音さまを背負った男が、手首から血を流して倒れていました。びつくりした寺男は、いそいそでお上人さまに知らせました。



知らせを受けて大急ぎで掛けつけたお上人さまは、観音さまの前にひざまづいて、ありがたいお経を唱えはじめました。それが終わると、手に持たれた数珠で、この男の体を二回、三回とさすりはじめました。すると、不思議なことに、今まで針金で縛ったようになっていた縄が、だんだんゆるみ、泥棒の体はもとのように自由になりました。

泥棒は、きよろきよろと目を丸くして驚くばかりでした。体が自由になった泥棒を寺に連れて帰り、温かいおかゆをた

いて食べさせ、傷の手当をした後、お上人さまは、じゅんじゅんとその男の不心得を諭しました。男は初めて目が覚めたように、今までの心得違いを心から謝り、お上人さまの衣にすがって、涙を流しながら、今からは悪いことはしないと固く固く誓いました。

その時です。今までたらたらと血が流れていた手首のけがは、なんと跡形もなく消えて、かすり傷ひとつありません。ところが、そばに置かれている観音さまの手首が折れていました。

かさねがさねの不思議ふしぎさに、泥棒どろぼうはもとより、お上人しょうにんさまも小僧こぞうたちも寺男てらおとこたちも、一斉いっせいに観音かんのんさまに頭あたまをさげ、手てを合あわ
せて拝おがみました。

観音かんのんさまに、りっぱな人間にんげんになると誓ちかい、心こころを入れかえたこの男おとこは、後のちに大阪おおさかに出て大商人だいしょうにんになりました。そして毎年まいとし、観音かんのん
さまへの感謝かんしゃの気持ちきもちをこめて、多額たがくの寄付金きふきんを送り続つづけたとのことことです。

『ふるさと豊浜とよはま 第三集だいしゅう』より